

## 平成 30 年度 第 1 回 浜松市総合教育会議 議事録

開催日時：平成 30 年 7 月 2 日（月）13:00～14:30

出席者：市長、教育長、石田委員、鈴木委員、渥美委員、安田委員、黒柳委員

会場：庁議室

傍聴者：1 名 報道関係者：2 名

---

### 次第

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 平成 30 年度の協議事項など
- 4 本日の協議事項  
「新学習指導要領に向けた小学校外国語教育の取り組み」について
- 5 閉会

---

## 1 開 会

（企画調整部長）

ただいまから、平成 30 年度第 1 回総合教育会議を開会いたします。会議の開催にあたり、市長からごあいさつをお願いします。

## 2 市長あいさつ

（市長）

皆様、ご多用の中ご出席を賜り、誠にありがとうございます。今年度第 1 回目の総合教育会議は、新しい学習指導要領の 1 つの目玉であります外国語教育をテーマといたします。グローバル化の中で、外国語教育の強化が、国としても大変大きな課題でございます。本市も多文化共生を始め、外国とのつながりの多い街であり、今後大変重要な課題となると思います。限られた時間ではありますが、皆様から忌憚のないご意見をいただきたいと思っております。どうぞよろしくをお願いします。

（企画調整部長）

それでは、本日の議題に移ります。ここからの進行は、市長をお願いします。

## 3 平成 30 年度の協議事項など

（市長）

まずは次第の 3、平成 30 年度の協議事項などについて、事務局から説明をお願いします。

（企画調整部 企画課長）

それでは、お手元の資料 1「平成 30 年度の協議事項などについて」をご覧ください。1 回目の本日は「新学習指導要領に向けた小学校外国語教育の取り組みについて」、こちらについて議論をいただきたい

と思います。また、2 回目は 12 月 11 日を予定し、議題は、(1)「人づくりの基盤となる幼児期の教育の推進について」、(2)「これまでの総合教育会議で取り上げたテーマの検証」で、コミュニティ・スクールや教育における ICT の活用について議論いただきたいと考えています。

(市長)

それでは、次回の協議事項等についてでございますが、協議で取り上げたい点や、ポイントとしたい点等ご意見がございましたらお願いいたします。

(渥美委員)

会議の持ち方につきまして、希望を述べさせていただきます。

今日の外国語教育の問題も、次回の幼児期の教育も大きなテーマですから、事前にある程度論点を調整させていただきたいと思います。そのための資料もある程度そろえ、中身のある地に着いた意見等を心掛けたいと思います。こちらでいろいろ準備させていただきますが、市長からも事前に意見をいただけると、準備を進めやすくなります。

(市長)

それは事前に勉強会のような論点整理のための会合をするということですか。

(渥美委員)

こちらの考えについて、市長から事前にご指摘いただき、事前整理したうえで会議に臨ませていただければありがたいです。

(市長)

分かりました。大事なことだと思いましたが、皆様のご負担にならないようにしなければなりませんし、事前に会合を持つのか、あるいは事前に論点に合わせて資料をお配りしておいて、皆様に見ていただくとか、いろいろなやり方があると思います。この件については事務局で調整をしてください。

私から 1 点、テーマにはありませんが、今関心を持っている事項があります。それは環境問題のことで、特に浜松はごみの減量化に大変力を入れていまして、もちろんごみを減らしていくことは、環境にとっても良いことですが、実はそれ以上に、ごみ処理には非常にお金がかかります。私は市長になって、それに一番驚きました。

ごみは新しい価値を生み出さないものであり、できるだけ減らしていきたいと思います。その分で予算が節約できれば、もっと前向きなことに使えます。新しい清掃工場ができますと、年間約 80 億円かかりますが、この金額はだいたい浜松の商工費と同じぐらいの規模になります。浜松の大変重要な産業施策とごみの処理が同じコストというのは、いかがなものかという思いがあって、できるだけこれを圧縮したいと思っています。

できれば私は、子供の頃から、ごみの減量化について、しっかりとした知識を持ってもらいたい。そうすることで、子供たちが大人になったときに、環境に対する意識が高くなりますし、子供たちが学べば、当然家族に伝わります。教育現場でのごみの減量に関する取り組みについて、一度この場でご議論

いただけたらと思います。次回、議題として追加できますか。

**(企画調整部長)**

事務局で打ち合わせをいたしまして、現時点の想定の内容で皆様からご意見を伺って議題を決めていきます。

**(石田委員)**

市長はごみの問題、環境問題について、教育の観点とは異なる観点から他の会議等でお話しされたことはありますか。

**(市長)**

あります。タウンミーティング等でも話していますし、現在、環境部を中心にごみの減量化に取り組んでいます。どうしても自治会への啓発等で終わりがちです。もっと根本的に、ごみの問題や環境と併せて、教育の現場でも取り組むことができればと思います。

**(安田委員)**

環境や福祉、防災、交通マナー等の課題は自治会への啓発と同じように、何でも学校に話が及びます。総合教育会議では、浜松の未来の子供たちのあるべき姿や、浜松の教育のあり方などを議題にしていると良いと思います。

**(教育長)**

総合教育会議の場で取り上げるかどうかは別として、子供の頃から環境を大切にする意識を、もっとしっかり根付かせていくということは、重要な視点です。当然教育委員会としても、しっかりやっていかなければいけないと思いますので、環境部とも連携して、どういう形が良いか考えさせていただきたいです。また、もう少し広く自治会全体や市民一般に広めて行くにはどうしたら良いかという点も必要かと思っています。

高齢化や人口減少の一方で世帯数が増加している中で、環境問題を全体で捉え、その中でいま一度、戦略的にどこを核とするか、どんなやり方が良いかを検討したいです。

**(市長)**

徹底的にこの問題について取り組んで行こうと思っています。その中で教育の現場での啓発も大事だと思っていますので、ここで議論する、しないは別として、大きな課題として教育長も認識しておいていただきたいと思います。

#### 4 本日の協議事項

##### 「新学習指導要領に向けた小学校外国語教育の取り組み」について

**(市長)**

それでは、次第の4、本日の協議事項ですが、「新学習指導要領に向けた小学校外国語教育の取り組み」

について、まずは事務局から説明をお願いします。

**(教育委員会 指導課長)**

それでは、資料 2 について説明をさせていただきます。1 の国の示す小学校外国語教育の概要等をご覧ください。(1) 学習指導要領の目的について、平成 29 年 3 月に告示された新学習指導要領では、「情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、子供たちが未来の創り手となるための必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育を実現する」とされており、育成を目指す資質・能力として、知識・技能等、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう人間性等の 3 つの柱が掲げられています。

(2) は現行の学習指導要領から新学習指導要領の実施に向けた、これまでの外国語教育の動向です。平成 23 年度から小学校 5・6 年生において外国語活動が必修化されましたが、平成 32 年度からの新学習指導要領では、小学校 3・4 年生に外国語活動が、5・6 年生には外国語科が導入されることとなっています。

続いて (3) 外国語教育の方向性と目標についてです。新学習指導要領では小学校、中学校、高等学校の学びを接続させ、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にすることとしています。

アとして、3・4 年生では「聞くこと」や「話すこと」等、言語活動を通して外国語に慣れ親しみ、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成するとされています。

更にイとして、5・6 年生では「聞くこと」「話すこと」に、「読むこと」「書くこと」も加えて、中学校への接続も重視した学習に取り組み、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成するとされています。

(4) の表に、小学校外国語教育に係る授業時数の比較を示しています。表の真ん中、移行措置期間とされる平成 30・31 年度は、3 年生以上において年間 15 時間、外国語の授業時数増加が求められています。表の右側、全面実施となる平成 32 年度はさらに授業時数を増加することになり、3・4 年生では年間 35 時間、5・6 年生では年間 70 時間、外国語の授業を実施することとなります。年間 35 時間、70 時間の実施を、いわゆる時間割的に分かりやすく言いますと、3・4 年生では週 1 時間程度、5・6 年生では週 2 時間程度が外国語教育の授業ということになり、週の時間割の総コマ数としては、今よりも 1 時間、週の時間割が増えることになっています。

2 は本市の取り組みです。(1) 新学習指導要領移行期間中の対応について、別紙 1 をご覧ください。本市といたしましては、移行措置期間におきまして、今年度は、3・4 年生で 15 時間の外国語活動、5・6 年生で 35 時間の外国語活動プラス 15 時間外国語科の授業を行っています。来年度は、平成 32 年度からの全面実施へのスムーズな移行を図るために、全小学校において平成 32 年度からの全面実施と同じ授業数、つまり 3・4 年生で 35 時間の外国語活動、5・6 年生で 35 時間の外国語活動プラス 35 時間の外国語科を先行実施する予定です。

資料 2 に戻ります。2 本市の取り組みの (2) 指定教育研究校による研究です。新学習指導要領による外国語活動、外国語科のスタートに向け、今年度から 2 年間、浜松市立西小学校を研究校に指定し、外国語教育の充実のための研究に取り組んでいます。その成果を公開授業や研修会等で各学校に周知し、市内小学校における外国語活動、外国語科の授業が充実するよう努めてまいります。

(3) 教員の指導力向上に向けた支援ですが、アとして、様々な研修の実施、イとして、ALT の配置、ウとして、小学校専科教員の配置について取り組んでいます。

アの研修の実施について、別紙 2 をご覧ください。基本的には小学校の学級担任ということになりますが、外国語教育の担当教員の指導力向上のための研修をまとめた表です。1 番から 6 番は、一般的な研修会、7 番は指導課で行っている学校訪問、8 番は先程の教育研究指定校による発表会で、これらについても、教員の指導力向上に資する場、研修の場であると捉えて表でまとめています。この表の中でも、3 番の英語指導力向上海外派遣は、15 名程度の教員をマレーシアに 4 週間派遣し、現地での生活全般を通して英会話等を身に付けてもらう貴重な研修です。今年度で 5 年目を迎え、本研修に参加した教員は市内各校で外国語教育のリーダー的存在として活躍をしています。

資料 2 に戻ります。2 の (3) イ、ALT の配置についてです。指導力向上に向けた支援として、英語の発音・発声を聞かせたり、外国文化を紹介したりして授業者を補助する ALT を配置しています。ALT が伝える外国の文化や生活についての情報、言葉、ジェスチャーの 1 つ 1 つが子供たちには大変新鮮であり、子供たちの外国語学習への興味・関心を喚起させています。本日は、市内のある小学校で、教員と ALT が実際に協同する中で授業を行っている動画を短くまとめたものを準備いたしましたので、スクリーンをご覧ください。

(動画上映)

#### (教育委員会 指導課長)

ご覧いただきましたように、外国語の授業では、担任が児童の実態や興味・関心、題材に合ったコミュニケーション活動を設定し、ALT と役割分担をして授業を進めていきます。ALT は易しい英語やジェスチャーを使って分かりやすく伝えたり、正しい発音を繰り返し聞かせたりしながら、授業者を補助しています。子供たちにとって、ネイティブスピーカーとしての ALT と直に接することのできる時間は、学んだことを実際に試す場を保障し、自分の英語が外国人に伝わったという達成感につなげることもでき、ALT の存在の大きさは計り知れないものがあります。昭和 62 年頃からスタートした外国語の授業における ALT の配置は、いまやスタンダードな取り組みとして全国的に実施されており、子供の学習意欲の向上は元より、外国語能力の向上に大変効果的であるとされています。

資料 2 の 2 ページに戻ります。2 の (3) ウです。外国語活動、外国語科の授業の充実を目指し、今年度から小学校教員の中で中学校英語科の免許状を有する者を、外国語の専科教員として 9 校に追加で配置をしています。これらの専科教員による専門的な外国語の授業実施のあり方と、担任の負担軽減について、どのような効果があるか見ていきたいと考えています。

続いて資料 2 の 3 外国語教育の課題について、児童・生徒、小学校教員の 2 つに分けて整理をしています。(1) 児童・生徒の抱える課題は、学習の難易度が上がるにつれ学習意欲が低下すること、会話などのコミュニケーションの場面になると恥ずかしさからか積極性に欠ける場面が見られること、幼児期からの経験の違いによる個人差があること、といった問題が挙げられます。これらにつきましては、本市独特の課題というよりは、外国語教育に限らず一般的に義務教育年代の子供たちが持ちうる課題や感覚と言えます。

(2) として、小学校教員の課題を 2 点挙げました。1 点目は、ア指導経験の不足です。これまで、外国語教育は 5・6 年生のみで行われていましたので、高学年の学級担任にならなければ、外国語活動の指導は必要がありませんでした。小学校での外国語活動をスタートして 8 年が経過しましたが、未だ外国語の指導を経験したことがないという教員も少なからずおり、不安はなかなか拭いきれるものではありません。

ません。

2 点目は、イ新教材への対応です。全面実施に向けて、国からは今次々と新しい教材が送られてきています。それらを効果的に活用して授業を組み立てるためには、綿密な教材研究が必要であり、授業準備にかかる時間は確実に増えていくものと予想しています。

これまで国の動向とそれに対しての本市の取り組み、課題等について説明をさせていただきました。ここまでの説明を基にしました本日の論点は、(1) 浜松市の外国語教育のあり方、(2) 教員の指導力向上に向けての 2 つです。論点の 1 について、平成 27 年度に策定された「浜松市教育推進大綱」では、「子どもの学びと育ちを支える環境づくり」のために、「今後ますます進展するグローバル化、情報化などの社会環境の変化に対応する力を伸ばす教育の推進の必要性」を強調しています。まさしく新学習指導要領が目指す教育の方向性と一致しており、こうした教育を実現するために、「本市の外国語教育のあり方はどうあるべきか」という点について、ご協議いただきたいと思います。

論点の 2 につきましては、ア教員研修の充実、イ人的支援、この 2 つを小柱にさせていただいております。アの教員研修の充実につきましては、先ほど別紙 2 を用いて説明しましたとおり、すでに本市では様々な機会を捉えて、教員の研修を進めておりますが、今後の外国語教育に対応するために、さらに指導力の向上が求められていると考えています。これら既存の研修を見直したり、必要であれば新たな研修を立ち上げたりする中で、指導力の向上を目指していきたいと考えますが、そのための研修のあり方等について、ご協議いただきたいと思います。

イの人的支援につきましては、(ア) ALT の配置、(イ) 外国語教育に係る教員の追加配置の 2 つを視点にさせていただきたいと思います。別紙 1 をご覧ください。平成 31 年度から、これまでと同程度の ALT 活用頻度を保持するためには、ALT を 10 名増員することが必要と試算をしています。現在 ALT は年間授業時間の内、小学校で 3 分の 1 程度、中学校で 4 分の 1 程度授業参加をしています。来年度以降も 10 名の増員により、外国語教育の充実に有効な ALT を積極的に活用していきたいと考えています。

また、ALT には専門業者に委託している民間委託 ALT と、外国青年招致事業を通じて来日している、JET-ALT の 2 種類があります。別紙 3 をご覧ください。別紙 3 の左側には、民間委託 ALT と JET-ALT の利点や弱点についてまとめてありますので、必要に応じて協議の参考にしていただければと思います。別紙 3 の右側には、外国語教育に係る教員の追加配置についてのアイデアを説明しています。右側下の外国語専科教員については先ほど簡単に触れましたが、各学校の外国語活動、外国語科の授業だけを専門に行う教員として、今年度、国から追加配置があり、本市でも 9 校に配置しています。専科教員が授業を行っている時間は、その学級担任は授業を行わない時間となり負担は軽減します。しかし、外国語の授業を行う教員は専科教員だけとなりますので、小学校教員全体の資質向上にはつながらない点が心配です。また、週 24 時間程度の指導が専科教員の条件であるため、小規模校 1 校の外国語の授業だけでは条件がクリアできず、複数校を兼務する必要がある場合も予想されています。

別紙 3 右側の上には、専科教員と同程度の専門性を持つ外国語教育に精通した教員を、外国語コーディネーターとして配置し、学級担任の外国語授業の支援を行うという方法を記載しました。この方法は他市で、文部科学省指定の研究開発校として既に導入されている例があり、外国語コーディネーターが、学校の全教員の外国語活動や外国語科の授業に関わることで、教員全体の外国語指導のスキルが充実し、外国語に関する子供の興味・関心が高まったり、スキルが向上したりしたという成果が報告されています。

(市長)

今の説明に対して質問等あれば、先に伺います。  
疑問点や質問等はございますか。

(石田委員)

小学校の教員のうち、外国語活動を指導したことがない教員はどれぐらいの割合になりますか。

(教育委員会 指導課長)

調査を行っていませんが、教員の特性に応じて配置がされておりますので、これまでの 8 年間 4 年生以下しか担任をしたことがないという教員が少なからずおります。

(鈴木委員)

ALT を活用してきて良かった点分かる資料等はあるのでしょうか。

(教育委員会 指導課長)

本市で委託をしている ALT 配置業者が実施した、ALT の業務に対するアンケート調査結果があります。6 点満点中、「児童・生徒が ALT の授業を楽しみにしているか」という項目は 5.8 点、「児童・生徒のコミュニケーションの関心意欲、態度が向上したか」という項目は 5.1 点、「児童の聞く・話す力、もしくは生徒の技能の向上が図られたか」という項目は 5.2 点と、子供の興味・関心や資質・能力について明らかに前向きな回答がされています。

(市長)

それでは、論点に沿って協議をしていきたいと思えます。まずは浜松市の外国語教育のあり方について、委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。

(鈴木委員)

外国語教育のあり方について、まず多文化共生都市である浜松の場合は、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックや、ブラジルのオリンピック選手団の受け入れがキーワードになるかと思っておりますが、市長はいかがでしょうか。

(市長)

特にオリンピックは意識していません。これはもっと長い視点で考えていけないといけないことで、1 年程度で答の出ることではありません。オリンピックに向けた外国語教育について、教育委員会はいかがですか。

(教育委員会 指導課長)

多文化共生につきましては、昨年度改定された多文化共生ビジョンの中で市長がおっしゃったとおり、長い視点で考えていけないといけないという意識はあります。

(市長)

せっかく選手団がいらっしゃるので、例えばボランティア活動を通じて交流する等のことは考えています。ブラジルの場合ポルトガル語ではありますが、言葉は通じなくても、交流することはできます。

(安田委員)

私は、子供たちがコミュニケーションを楽しむ 1 つのツールが外国語だと思っています。子供たちは ALT と会話が成り立つとすごく喜ぶます。先ほどの映像の中で、子供たちが慣れていないのか、ALT と距離があると思いました。ALT の良さというのは、教員の指導力向上の支援というのがありますが、子供たちが動じずに、外国の母国語を持った人とコミュニケーションが取れるというところです。子供たちがコミュニケーションの楽しさを学ぶということが、浜松の外国語教育のあり方に含まれると良いと思っています。

(市長)

なるほど、大事な視点ですね。

(安田委員)

研究指定校である西小学校の授業を石田委員と一緒に見せてもらいましたが、小学校 1・2 年生が本当に楽しそうに、担任の先生と英語のやり取りをしていました。校長先生から、「英語を教えるというよりも、コミュニケーションとして外国語で会話が通じると楽しい」、という意欲付けも図っているとされていて、本当にこれは 1 つのツールなのだなと思いました。流暢な英語を話すことを目的としなくても良いのではないかと感じます。

(渥美委員)

小学校の英語教育で教育委員会あるいは学校として一番注意しなければならないのは、外国語を話すことは面白い、子供たちがそう思うような教育が大事だということです。小学校の学校教育では、間違いだと教えるのではなく、正しくはなくても意味は通じる、意味が通じると楽しい、楽しければ好きになる、ということを中心に掛けてもらいたいです。

(石田委員)

外国語を学ぶことによって、違う言葉話す、違う文化があるのだと感ずることができ、違うものを受け入れたり、認めたりしていくうちに、偏見や差別がなくなっていくと思います。浜松の子供たちには、外国人に対してだけでなく、誰に対しても偏見や差別を持たず育ててほしいと願っています。外国語を習得するという切り口ですが、実は言葉を習得する背景には、人を育てることが含まれていると感ずており、そのような視点で学校の先生方も育ててほしいと思います。

(黒柳委員)

息子が小学生の頃、ALT に初めて出会った時に言った言葉が、「英語ってすごく楽しいね」でした。初

めて学校で外国の方と触れ合ったときに、楽しいと思えたということが、まず一歩だなと思います。やはり英語が嫌いになると、とことん嫌いになってしまいます。英語が楽しいという思いで、子供たちがずっと授業を受けられるような環境でいたいと思います。

(市長)

できるだけ外国人と接する機会を多くして、あまり型にはまらないコミュニケーションをとることが大事だということですね。

(石田委員)

外国人と接するというということで、何歳から英語を始めたら良いか等、いろいろな説があると思います。それは音であったり文法であったり、何の勉強をいつから始めるかということは、様々な比較の条件があって難しいです。ただ音に関してだけは、やはり小さければ小さいほど良いと言うのですが、母国語の読み書きができるようになった小学校3、4年ぐらいが一番適しているという説が、どの学説でもあると聞いていますので、この時期に本物の英語に触れさせるということは、必然的に増やさなくてはいけないと思います。

(市長)

中学校の授業を前倒しするような英語教育では意味がありません。

(教育委員会 指導課長)

読み書きですが、今のところ中学校並みということではなく、6年生までにアルファベットをきちんと書けるようにする程度だと聞いております。ただ、中学校の英語の前倒しではないということははっきりしています。

(市長)

私は、外国人と接してコミュニケーションを試すことを知ると同時に、個々で外国語の勉強を継続することが必要だと思います。そして、個人で会話の勉強ができる場へ、つなげてあげることが大事だと思います。

(石田委員)

多くの大学の研究者が市長のようにおっしゃっていて、いつから始めるということよりも、いかに良質なインプットがたくさんあるかが大切で、週に1時間や2時間の授業だけでは、実際のところ自由自在に話すことはできないと思います。外国語に対する興味や関心を普段の生活においても持続させることは大切だと思います。

(渥美委員)

物事を習得するには繰り返しが絶対必要です。日本ではなぜ英語教育が定着しないのか、話せるよう

にはならないのか、という理由には、周りが話していないから、教える人が話せないから、ということが挙げられると思います。教育や勉強は、繰り返し自分の体に染み込ませない限り、ものにならないと思います。だからクイズのような英語の文法を覚えて、ここに何の単語を入れますか、ということをやっている限りは、おそらく話せません。やはりコミュニケーションをして、話す面白さというのを、いかに学校の段階で覚えさせるか、そういう教育をしていかない限り身に付かないでしょう。幸いにして今はその意識を持てば、自分で英語を繰り返すチャンスはいくらでもありますので、それを先生が気づかせてあげるという教育を心掛けてもらいたいと思います。

(市長)

先生が、そのことを知っているかどうかですね。

(石田委員)

興味がある子には、引き出してあげることも大事なのではないのでしょうか。

(渥美委員)

静岡県西部は外国人がたくさんいらっしゃることで、中部や東部よりも異文化や外国人の方と触れる機会がはるかに多いという特色があります。良い意味でも悪い意味でも触れる機会が多いのです。浜松では外国人と触れる機会がありますが、浜松にいらっしゃる外国人の方は英語を話す方が特別多いわけではなく、日常的に英語に触れるという機会はあまり多くありません。それをどのように学校が、どういう形で毎日繰り返すような心掛けをしてあげるかということが大事だと思います。

(市長)

次の論点も入ってきていますので、教員の指導力向上に向けてどうするかということも併せて議題としたいと思います。

(石田委員)

小学校の学級担任が英語を教えることに関して、特にマレーシアの研修に行かれた方はかなり優秀で、子供が飽きない授業をしていると感じました。ただ英語を教えるだけなら、私でもできるかなと思いました。ところが、小学校の外国語教育というのは、他の教科との横断的な関係もあって、例えば外国語の授業で、国語の漢字の何画というのを「How many strokes?」とするように、ただ相手に何歳と聞くだけではなく、奈良の大仏は何歳とか、浜松市は何歳になったとか、学校の活動や教科とミックスさせて教えることができるのは、やはりプロの義務教育の先生だなと感じました。子供たち一人一人の性格や家庭環境等、背景を把握しているので、それに合わせてタイムリーな発問や設定ができるというのは、やはりすごいなと感じました。外部人材は、例えば外国語の絵本の読み聞かせや土曜授業等、学校の先生と違った視点で外国語の授業をする際にゲストティーチャーとして呼ぶといった補助的な活用の仕方が良いのではないかと思います。

**(安田委員)**

西小学校の授業を見学した際に、小学校高学年の先生は教員になる時に自分がいつか英語を教えるなんて、きっと想像もしていなかっただろうなと思いました。もし自分だったら、本当にそれはすごいストレスで、苦しい日々になるだろうなと想像できます。そう思うと、マレーシアの研修に行った先生はにこにこ笑って楽しそうに、小学校 1 年生の子を 45 分間英語に飽きさせないというその技術がすごい指導力だなと感心しました。1 クラスに還元するのはもったいないと感じます。外国語コーディネーターのような立場で各学校に 1 人ずつ配置し、外国語の授業をやるのではなく、他の先生たち全員に授業のやり方等の指示を出したり資料を準備したりすることで、先生たちもどうやってやればいいのかという悩みからは解放されますし、授業をしていくうちに先生も上手になり楽しくなっていくと思います。

私は論点の (2) のイのような、外国語コーディネーターと外国語専科教員で行うのなら、専科教員を置く方法も確かにあるかと思いますが、全体のレベルアップや、誰がどこへ行ってもそういう指導ができるようにするために、まずは何年か 1 人プラスでコーディネーターにしてはどうでしょうか。どのくらいで今の先生たちの指導力がレベルアップするのか分かりませんが、思い切ってやっていかないとけませんし、実際見てその学級だけに下ろすのは本当にもったいないと思います。

**(渥美委員)**

おそらく今の小学校の先生は、基本的に全教科を教え、そしてクラスを持っています。これから英語の教育が小学校に下りてきて、コミュニケーションが大事だという視点から英語教育をすることになると、その研修というのは先生をどう指導していくか、一人前にしていくかということになるでしょう。英語教育に携わる先生を採用するという視点は、私は大事だと思います。例えば、先ほどの西小学校の風景を見ていると、あの外国人の方の子供に対する接し方というのは、多くの日本人とはちょっと違います。あれはおそらく英語というのが話すところから始まっているからでしょう。日本語というのは、漢字とカタカナとひらがなという文字文化から始まっておりますから、フランクなしゃべり方は、多くの日本人はあまり得意ではありません。ところがあの外国人の方はまず言葉を投げ掛けています。これは教育の原点で、スキルから入っていくことが日本の教育ですが、実際は寄り添うことが一番大事だと思います。

日本人の場合で一番感心したのは、幼稚園、保育園の先生です。あの接し方は、この英語教育の初歩の初歩には非常に大事だと思います。そういう視点からの採用であり、研修であってほしいと思います。

**(教育長)**

マレーシアへの研修は当初、市長のご理解もあって、まず 5 年間取り組んでみようということで進めてきました。安全確保のために行けなかった年もありますが、今年度までには 60 名余がマレーシアに行きました。研修を受けた者は確実に、英語力、何よりコミュニケーション能力がすごく上がっていると思います。先生はどうしても教える側なのですが、海外の大学に行き、教えられる側になることで児童・生徒の気持ちも分かります。国際感覚という点では、エネルギーな東南アジアということもあって、いろいろな民族が共存共栄しているということで、浜松が目指しています多文化共生も肌で感じられるところがあると思います。現地に進出した日系企業の視察もしていますので、英語の勉強だけではなく、いろいろなものを学んできていると思います。浜松の教育としては、キャリア教育の充実を進めていま

して、子供たちが本当に将来、英語が必要になったときに活躍できるように、いろいろな可能性を持っていてあげたいと思っています。まずこの 5 年間の総括をしまして、また来年度以降、続けていけるかどうか検討していきたいと思っていますので、もし市長からも何かお考えがあれば、お聞かせいただければと思います。

もう 1 点は研修の関連で、研修は別紙 2 で示したように大きく 8 つの項目がありますが、英語教育は国から求められる前から行ってきたものですから、今までの既存のものに足したものだと感じています。今までは個々の学校で、その学校の事情によって研修に取り組んできたところがありますが、これからは教員一人ひとりのスキルといった、英語の能力を計画的に伸ばしていく必要があります。現行の研修制度を再建して系統的な研修を行い、できれば個人の先生の研修の履歴が残るようにしていけると良いと思っています。その中でマレーシアの位置付けも考えていきたいです。

#### (市長)

1 か月の研修で完璧にスキルが身に付くとは思っていません。それは教育長が言ったように、本人自身のモチベーションが高まれば、あとは自分で勉強を進めて欲しいです。帰国後でも、今はいくらでも学習する手段があります。これから小学校で外国語の授業が始まるに当たり、海外へ行って外国の人と接して、本人のモチベーションが上がれば良いと思います。いつも言うのは、これで終わりではなく、ここからあなた自身が英語のブラッシュアップをしてくださいということです。それが子供たちの英語力の向上につながります。研修に行った人がその後自分で自己研鑽しているかどうかチェックして、できているのであれば意義があると思います。

#### (教育長)

安田委員からお話があったように、将来的にはコーディネーターとしても育成できるだろうと思っていますので、5 年前からマレーシア研修を進めてきた所は、浜松の強みだと思っています。

#### (市長)

私たちがたくさん英語を勉強してきましたが、多少読むことはできてもコミュニケーションがとれません。これだけ英語を勉強しているのにコミュニケーションがとれないのはなぜだということが原点にありますので、聞く能力と話す能力を身に付けるため小学生の時から文法を学ぶのではなく、JET の ALT と遊んだり一緒にどこかへ行ったり、日常的なコミュニケーションをとることの方が私は大事だと思います。

#### (石田委員)

民間の ALT の場合、例えば休み時間一緒に遊ぶことはできますか。

#### (教育委員会 指導課長)

休み時間もいることはあります。

(市長)

ボランティアでいるということですか。

(教育委員会 指導課長)

契約というところは、市長がおっしゃるとおりです。JET の ALT でも授業の後、次の学校へ行ってしまいうこともあるので、1 校に 1 人ずつ JET の ALT を配置すれば 1 日その学校にいることになりますが、JET の ALT も実は、学校を複数担当していて、例えば午前と午後で別の学校へ行くこともあります。

(市長)

しかし、市で雇っているのもあって、派遣とは違うのでしょうか。

(教育委員会 指導課長)

はい、市の非常勤職員になっています。

(市長)

だから一緒にハイキングへ行くこともやろうと思えばできるのではないですか。

(教育委員会 指導課長)

そうですね。仕組みをつくって制度の中であればできると思います。

(渥美委員)

現場では JET と民間の ALT の長所と短所をどう整理しているのですか。

(教育委員会 指導課長)

民間の ALT は職業としてやっていますので、例えば、小学校で初めて英語に触れる、外国人と接するという子供に対しては、かなり有効だと学校現場は捉えております。逆に JET の ALT は、日本に来た外国の方という捉え方ですので、中学校で生徒がリードすることでコミュニケーションをとるというように、発達段階に応じて、利点・弱点をうまく使い分けると学校は捉えております。

(渥美委員)

小学校 3 年生、4 年生、あるいは 5、6 年生の指導をお願いするとしたら、現場としては JET と民間のどちらが良いと思っているのですか。

(教育委員会 指導課長)

先ほどの外国語コーディネーターの話とリンクするところがありますが、民間の ALT が持っている教材開発のスキル等、小学校の教員としても学ぶべきスキルがまだまだたくさんあるように思っていますので、小学校での 3、4 年生を担当する ALT としては、教員の資質向上という意味でも、民間の ALT に対するニーズが高いと捉えています。JET の ALT は、日本語でのやり取りができない方が少なからずいますので、

そういうすみ分けで学校ニーズを解消しています。

**(渥美委員)**

民間の ALT の場合、日本語はある程度できるということですか。

**(教育委員会 指導課長)**

とても堪能です。JET の ALT も日本に興味がありますので、ある程度日本文化は勉強してきます。

**(石田委員)**

民間も JET もそこまで割り切って、時間外のことはできないし行かないと言う人もいないような気がします。どうですか。

**(教育委員会 指導課長)**

契約上、民間の ALT については、時間単位の労働契約のようではありますが、実際は休み時間に子どもと遊んでいる ALT もいます。その授業しかやらないというわけではありませんので、JET も民間も、その人の個人的なキャラクターとして、余分な業務までやってくださっている方は大勢いますし、そういう心持ちがあるので、外国に行って英語の文化を伝えたいということで、こういう職に就いているのではないかと思っています。

**(安田委員)**

JET の ALT は地方交付税の措置があるので、経費という面では JET の ALT がたくさん来た方が良いと思うのですが、そこは仕組みで変えられないかと思っています。また、9 月からではなく、4 月からという派遣の仕組みも変えて欲しいです。それから JET の ALT の場合、アパートの手配等の世話を全部市が行っています。例えば JET の ALT を 10 人ここに派遣する時には、そのコーディネーターも 1 人付けるように国がしてくれると良いと思います。民間の ALT は、何か困ると会社の人 comes しますので、お金を払うだけのことはあるなと思いました。

JET は自動車の運転をしてはいけませんので、例えば 2 校、3 校掛け持ちだと公共交通機関の利用のため時間がかかってしまいます。

**(市長)**

ローテーションの仕方が悪いのではないですか。

**(安田委員)**

学校と学校は比較的近いのですが、直通のバスがないという理由からです。

**(渥美委員)**

学校現場の声も参考としながら、最終的には、JET と民間のどちらが子供たちにとってありがたい存在かという点が必要かと思っています。

もう 1 つ、日本では英語を長い期間勉強しても話すことができません。個人が自分で勉強をしないということは悪いことですが、ほとんどの人が話すことができないのは教育に問題があると思います。今度は制度の構築を間違っははいけません。今回の外国語教育、特に小学校の外国語教育というものを、本腰を入れてやっていただきたいです。教育委員会もいろいろな視点から検討を加えて、より良い制度にしてもらいたいと思います。

**(黒柳委員)**

英語の嫌いな子供が ALT の授業で生の英語を耳から聞くことで、ヒアリングがすごく得意になったという例があります。

**(市長)**

聞きとりができなければ話せないので、まずヒアリングです。

**(黒柳委員)**

そうです。聞くことで発音も良くなって、いろいろな単語にも触れると、自分から単語が出るようになります。英語に全然興味のない子でも興味を持つような指導を、これからも進めていただけるとありがたいと思います。

**(市長)**

浜松にたくさんいる海外駐在員の家族といった人に支援員で来てもらって、JET と先生のつなぎ役をお願いしてはどうでしょうか。英語が話したくてしょうがないという人の活躍の場も作っていったらどうかと思います。

**(企画調整部長)**

いろいろとご意見が尽きぬところでございますが、時間が超過しておりますので、本日の意見交換で出された意見・課題のまとめがあればお願いします。

**(市長)**

共通認識としては、いかに子供たちの英語のコミュニケーション能力を高めるかということが根本的なテーマだと思います。そのためにどうすればいいかという問題意識の基に、何が子供にとって良い仕組みであり、やり方なのか等を考え取り組んでいきたいと思っています。

皆様から最後に何かありますか。

**(鈴木委員)**

西小学校を見学した際に校長先生が、ALT 等が学校に来て英語で話す、もしくは母国語が日本語でない方と話すという場合には、英語でどのようにして話すかということも大事ですが、日本のことを日本語でどう伝えていくかということも考える機会として話されました。母国語は日本語だということも意識していくような外国語教育であってほしいと思います。

(市長)

他にはよろしいですか。では事務局お願いします。

## 5 閉会

(企画調整部長)

ありがとうございました。以上をもちまして、第 1 回総合教育会議を閉会いたします。

(終了)